

図書館

第 19 号

だより

1989. 4. 1発行

編集兼発行 三重短期大学附属図書館 514-01 三重県津市一身田中野字蔵付157 Ⅱ 0592
32-2342

目 次

- 落語を読む楽しみ 東福寺 一 郎 (1)
古足跡化石発見(約200万年前のステゴドン象) ... 角 田 保 (3)
新規受入図書案内(昭和63年4月以降受入分) (5)

落語を読む楽しみ

東福寺 一 郎 (法経科助教授)

先代三木助、先代金馬、文楽、志ん生、円生、馬生いずれも今は亡き名人上手達である。私がなまの高座を見ることができた人もいれば、私が落語に興味を持つ前に故人となってしまった人もいる。私は小学5年生の頃、演者は覚えていないが、「転失気」という噺をラジオで聴いて笑いころげたことがある。それ以来、私は落語が大好きになった。しかし、私自身は落語を演らない。もっぱら聴くのみである。テレビやラジオで放送される落語は無論のこと、レコードやカセットを買い込み、例えばドライブをしながらニヤニヤ笑って楽しんでいる。東京にいた頃は、寄席や落語会にも足を運んだ。

落語は1人の役者が手拭と扇子の小道具だけで、かつ上半身のみの演技によって私達を魅了することのできる演劇である。落語が一般の舞

台と異なるのは、聴き手の想像力に依存するところが大きく、同じ高座であっても、聴く人によってそれぞれ少しずつ異なったイメージ世界が創出される点である。落語の本来の味わいは、このように高座を見ながら噺に耳を傾け、独自の世界を頭の中に作りあげることである。

しかし一方で、活字となった落語を読むことにもまた別の味わいがある。落語は民衆の中から生まれ、民衆によって支持され、育てられてきた日本独特の民衆芸術(落語は流派に芸術であると筆者は思ふ)である。古典落語では、江戸、明治、大正期の民衆の生き様や人情の機微が見事に描き出され、叙事的文学のひとつのジャンルを形成しうる観がある。少なくとも当時を知る貴重な資料のひとつと言えらる。そんな

そんなに鮭張らなくとも、活字を読み進みながら、自分の好きな噺家の高座を思い浮かべ、ここではこのような仕草をするのだろうか、この語り口はどうするのかなどと想像すること自体が楽しい。そもそも落語本には、演者を限定せずに噺の原形を忠実に示したテキスト的なものと、特定の噺家が演じた高座を録音し、

それを再現したものがある。そして今述べたような読み方をするのであれば、後者のような落語本の方が適していることは言うまでもない。私も志ん生、円生、馬生の落語全集を手元に置いている。こうした本では、噺のまくらや途中のくすぐりなども高座そのままに再現されているため、たとえなまの高座で聴いたことがない噺であっても、頭の中で口調や間、仕草をイメージすることはむずかしくない。また、同じ噺であっても演じる噺家が異なると落語の趣も異ってくる。聴いている時にはあまり意識されない演じ方の違いも、活字になると目立つようになる。

次に引用するのは、「子別れ」という有名な人情噺の一節を、志ん生と円生がそれぞれ演じたものである。腕はいいが遊び好きの父親が、酔った勢いで女房と一人息子を家から追い出してしまふ。しかし、その後改心し、仕事に精を出すようになり、生活も安定する。そんな折、偶然に、別れた息子と再会するという場面である。志ん生の場合は、

「(近寄って) おっ、どうしたどうした、え、金坊ォーッ」
「あっ、お前さん、おとっつあんだな？」
「どうしたい？ りっ、おり、おり、ずいぶん大きくなったなァ」
「おまえも、大きくなった」
「よせよ。オイ、おれ、わかるか？」
「わかるよ……ウ、ウェーン……(と泣く)」
「おい、泣かなくてもいいんだよ、なァ。おい、泣くんじゃねえ、泣くんじゃねえやな。で、家はどこだい？」
「家はあすこの、八百屋と豆腐屋の裏……」
「おォ、そうか」
「はいってって突き当たってね、あのごみための前……」
「ハネ虫みてえだな。そうか、ウン。で、今度のおとっつあん、可愛がってくれるか？」
「おとっつあんはお前だいッ」
「おれ、先のおとっつあんだ、今度のおとっつあんよ」

「あとから親ができるなんがあるものか。子供が先にきて、親があとにできるなァ、イモくらいのもんだ」(立風書房、志ん生文庫より)

一方、円生の場合は、

「おりおり、亀、亀、おい、亀……ふふ、きよきよしてやがる。どこを見てるんだ、おり……こっちだよ」(と、手招き)

「(父親の姿を認め、なつかしさを舌がまわらない) ヤァ、お父……お、お父っちゃん……だね」

「何をはにかんでんだ、おい。こっちこいよ。どうした(感慨深げに)……大きくなったなァ」

「お父っつあんも大きくなった」

「俺ァ大きくなりゃァしねえや。色が黒くなって、背も伸びやがったなどうも。へへ……

あァ、丈夫丈夫してきた、うん。おっ母さんは達者か？ そうか……(ちょっと探るように) お父っつあんはかわいがってくれるか、え？ お父っつあんはかわいがってくれるかよ」

「うん？……お父っつあんがかわい……お父っつあんて、おめえがお父っつあんだ」

「おれは先のお父っつあんだな。今度、あとから出来たお父っつあんがあるだろ」

「(笑って) へへ、そんなわからねえ奴があるもんか。いくら世の中がひらけたって、子供が先ィ出来て、親があとから出来るなんて……子供が先ィ出来るのは八つ頭ばかりだ」

「生意気なこと言ってやがる……じゃァ、おっ母ァとなにか、二人か？」

「うん、二人きりだよ」

「ふふ……そんな事ァねえんだろ、え？ おめえはまだわからねえが、夜ンなって泊まりにくるおじさんがあんだろ」

「ううん、そんなものァありゃしないよ。あのね、畳が二つつなんだもの。いろんな荷物があって、あたいとおっ母さんと寝るといっばいになっちゃう……あたいが時々ころがり落っこちる」(集英社、圓生古典落語より)

両者とも大筋は同じであるが、ポイントでの表現が異なる。息子の名前も「金坊」と「亀」

古足跡化石発見

(約200万年前のステゴドン象)

角田 保 (家政科教授)

この新聞記事活字が出たのは、昭和63年9月25日の日曜日である。朝日、毎日その他の紙上に同時に大々的に出たのです。私は前日に滋賀県の松岡長一郎から聞いていたので明日は現地に出張の予定をしていた。

滋賀県甲賀郡甲西町の野州川河原から約220万年前のステゴドン *Stegodon* ヤエラプス (ツフゾウ) の足跡化石がおよそ100個余り見つかり、調査団が編成され、亀井節夫京大理学部教授が団長となり調査記録が開始され初めた。

発見者は、滋賀県総合教育センター田村幹夫研修主事である。

河原の南北約50米、東西約300米の範囲内に約100個以上の大小の足跡が確認されたのである。

現場は古琵琶湖層群蒲生層といわれる粘土層で、地質時代の第三紀末の鮮新世後期にあたる。去る8月15日～16日の大雨で増水し、河原の土砂が流されて出てきたのである。

10月4日(火) A. M. 10:00晴天でまず次のステゴドン象の足跡化石を計測する。

左右40種、上下の長さ54種の足跡が計測された。また上下長41種、左右長25.2種、(前足跡)上下長26.3種、左右長27.4種、左右長23.5種、上下長28.7種、左右長33.2種、上下長41.1種(後足跡)あり、左前足跡と左後跡長が100種、右前跡と右後跡長が23.8種、右後跡と左後跡長が39.2種のものが比較的象の四脚だと判明されたので計測した。

この旧象化石は剣歯象と呼ばれるもので三重県北伊勢地方から多々出土されている。

現存する象はインド象とアフリカ象の2種でそれより以前には300種以上も旧象がいたのである。陸上生物で何人と言っても、最大の動

であるが、多くの噺家は「亀」を採り入れている。全体的に、久方ぶりの父子の出会いとしては、志ん生の方が淡泊であるように思う。その点、円生は表現に工夫を凝らしており、この場面の演出としては秀れていると言えよう。しかし、ここではそのような演出の優劣を問わずに、2ヶ所の演出の違いを指摘したい。まず、子どもへの近づき方である。志ん生では父親が息子の方へ近寄りつつ呼びかけているが、円生の方は、父親が遠くから名前を呼び、息子を自分の方へと近づけている。2つめは、母子の住む家のみすぼらしさを表現するところである。志ん生は、こみため前で虫がわきそうな所に家があるというように周囲の情景で表しているのに対し、円生は、2畳間で荷物を置くと母子2人が寝るすき間が充分にないという形で表現している。

このように、同じ噺を噺家がどのように演じるのかを比較した上で再び高座を見ると、落語の味わいも格別なものとなる。かつて、森村誠一の「野性の証明」が映画化されたときに、「見てから読むか、読んでから見るか」というコピーが流されたが、落語は「見てから読んで、また見る」ことを薦めたい。

噺家はよくくすぐりとして「落語はためになる」と言うが、これがまんざらうそではない。以前、私が円生の「百川ももかわ」という噺のまくらを読んで勉強になったことを例に挙げ、筆を置く。それは、四神剣しじんけんというものを説明する箇所であった。四神剣は神田祭で使われる祭器で、四方の神様を祀った旗の先に剣がついているものだそうである。四方の神様とは、東が青龍、西が白虎、南が朱雀、北が玄武(黒い亀)を指す。浅学な私は、こうして大相撲の土表上にある4色の房の意味を知ったのである。

物はゾウである。

しかし歯の形が昔のゾウと今のゾウと違います。昔はV字型で今はU字型で浅く平面状態へと移動進化していることが明瞭に判るのである。筆者が初めてゾウの化石を発掘したのが昭和31年9月に員弁郡藤原村上之山田のパラステゴドンアカシエンシス。タカイ *Parastegodon akashiensis* TAKAI である。それより0.6ヶ年前(昭和30年3月には、河芸郡河芸町北黒田産の *Stegodon elephantoides* CLIFT という象を発掘しています。

Stegodon 象と *parastegodon* 象で、*Stegodon* 象のが古く今回はじめて滋賀県で発見されたのである。当時奥山泰堂氏が *Stegodon* 象を彫刻し、東大教授 高井冬二先生が立ち合っています。

ゾウにつづいてシカの化石(古足跡)について記述しましょう。

セルプス *Cervus* 属については、現世のシカを考えて頂いたらよく似合うと思います。

2つに分かれたヒヅメが深く泥につきささっているところから鹿のものだと推測される。

次は、エラプルス(四不象)ではないか(古足跡)とされるものが沢山残されている。

そもそもシフゾウと云われるシカはどんな動物なのか、ここで一寸詳しくのぞいてみよう。

シフゾウはいま世界各地の動物園に約1,500頭にまで増えて絶滅の危機は少し遠のいた様だ。中国の北方地方説が有力だったが、4年前に上海自然博物館が化石の分布状態(古生態学)や古文書をもとに新説を発表してから南方説が有力になってきている。野生最後の生息地も揚子江の河口付近となっている。約1万年前の推定生息地が黄河と揚子江の下流の流域で、北は北京(南苑)から生息地とされています。

四不象はもともと想像の動物であるキリンのことなのです。キリンの頭は竜、足は牛、尾はシシ、胴体はウロコがおおっている。

このため四不象と呼ばれていたんです。その昔に、中国の皇帝たちは北京郊外の南苑とよばれる狩りょう場に、シフゾウという奇妙

な鹿を集めて飼っていた。故宮に資料がある。

故宮とは、清朝の皇帝が住んだところである。シシ、ゾウ等の現実の動物達に交って、竜、ホウオウなど想像上の動物の絵や彫刻がいたるところにある。シフゾウは「皇帝の鹿」だった。南苑にひっそりと生き続け、決して民衆の目にふれることがなかった。高い塀の中の動物は想像力をかき立ててきた。この想像の動物なのである。

1894年、大洪水が南苑をおそった。かろうじて生きのびた20頭~30頭も1900年に起きた義和団の乱の犠牲となってしまった。

内乱の制圧にやってきた西欧人兵士が殺して食べてしまった。シフゾウは中国から姿を消してしまった。南苑自体もそれから11年後の辛亥革命による清朝の滅亡と共にその歴史を閉じたのである。(朝日新聞1988年(昭63年)11月6日)

それから1世紀ちかく、この「皇帝の鹿」の血をひく子孫が生まれ故郷中国に帰ってきた。

南苑の歴史は13世紀の元の時代までさかのぼる。明、清の拡張を続け最終的には周囲72kmの拡大な敷地を誇った。

英国のベドフォード公爵邸の庭にシフゾウの群れが先祖の種の絶滅の危機を救ったのである。南苑自然保護区では、ボイドさんがシフゾウを温かく見守っているカラー写真がのっていた。

ボイドさんとシフゾウの出合いは20年前にさかのぼる。その頃は他の動物とちがって(6)編しか論文がなく、他の動物とちがってロマンチックであった。

今から200万年前に日本にも生息していた。滋賀県、兵庫県、千葉県などでシフゾウの角や足跡の化石がみつまっている。

明治21年に清朝から上野動物園に贈られたのが最初で、現在は東京・多摩動物公園・神戸王子動物園・秋吉台自然動物園・熊本動物園で見ることができる。70種にもなる牛の尾に似た長いシッポも特徴のひとつで学名ウシも「尾の長い鹿」の意味である。

学名がエラフルス・ダビデアヌスである。

1985年8月北京空港に着いたベドフォー
ド公のシフゾウ20頭が85年ぶりに南苑に放
された。さらに昨年第2陣の18頭がやってき
た。南苑で生れた子供もあわせて53頭にまで
増えた。

南苑に回帰してから1年後WWFも中国林業
部と協力して江蘇省大豊県にシフゾウ保護区を
つくった。そこに英国五ヶ所の動物園から集め
た39頭を放した。ここも今では55頭にまで
増えている。

さて足跡がみつかった処は、野州川で蒲生湖
があった処で、その証拠に *Inversidens hirasei*
Haas インガイがとれた。長さ5種以上の貝殻
化石である。

その他に樹木の根元があちらこちらに散在し
ていた。

新規受入図書案内

(昭和63年4月以降受入分)

総記(000)

(岩波新書 新赤版)

日本人の英語	マーク・ピーターセン
競馬の人類学	長島 信弘
エビと日本人	村井 吉敬
生物進化を考える	木村 資生
ゴルバチョフの時代	下斗米 伸夫
燃える中南米	伊藤 千尋
女たちが変えるアメリカ	ホーン川嶋 瑤子
哲学以前の哲学	松浪 信三郎
緑の昌隆	向後 元彦
日本人はどこから来たか	加藤 晋平
天皇の肖像	多木 浩二
日本の幽霊	諏訪 春雄
日中アヘン戦争	江口 圭一
演劇とは何か	鈴木 忠志
パソコン入門	石田 晴久
中国改革最前線	天児 懸
大恐慌のアメリカ	林 敏彦
ドルと円	宮崎 義一

正倉院	東野 治之
農の情景	杉浦 明平
色彩の科学	金子 隆芳
台湾	戴 國輝
私の知的生産の技術	梅棹 忠夫
ラグビー荒ぶる魂	大西 鉄之祐
スイスを愛した人びと	笹本 駿二
新版 軍縮の政治学	坂本 義和
問題群	中村 雄二郎
和の昭和史	加藤 周一
サーカス放浪記	宇根本 由紀
サッチャー時代のイギリス	森嶋 通夫
チュエルノブイリ(上・下)	

R. P. ゲイル 他著

(岩波ブックレット)

さくら隊8月6日	新藤 兼人
私たちはいまどこにいるか	
	大江 兼三郎 他著

破壊される熱帯林

地球の環境と開発を考える会 編

原爆被爆者の半世紀	伊東 壮
あなたに話したいことがある	落合 恵子
ベトナム戦争と日本	吉沢 南
日本の敗戦	荒井 信一
二・二六事件	須崎 慎一
消費税	北野 弘久
大東亜共栄圏	小林 英夫
国家秘密法 私たちはこう考える	

日本ペンクラブ 編

核廃絶と世論の力

核軍縮を求める2.2人委員会 編

住宅感章	日本住宅会議 編
子連れ出勤を考える	

アグネス・チャン 他著

南京大虐殺	藤原 彰
自由人権とナショナリズム	久野 収
占領と戦後改革	竹前 栄治
日独伊三国同盟と第二次大戦	大畑 洋一
高度成長から経済大国へ	伊藤 正直
蘆溝橋事件	江口 圭一
情報公開はなぜ必要か	自由人権協会 編
世界年鑑 '88	共同通信社 編
日本の白書 '88	

日本情報教育研究会 編

雑誌新聞総かたろぐ '88

一メディア・リサーチ・センター

プログラム著作権とは何か	
	紋谷 暢男 他著

大学研究所要覧 日本学術振興会 編
 時事俗事ものしり読本 主婦と生活社 編
 時事年鑑 '88 一時事通信社

プログラミング入門シリーズ
 情報処理の基礎
 Pascal プログラミング
 Basic プログラミング
 Z-80 アセンブラプログラミング
 Fortran 77 プログラミング
 Cobol プログラミング

コンピュータによる数値計算 水上 孝一
 現代人コンピュータ

Basic 入門 高山 由 他著
 Fortran 入門 橋原 清
 コンピュータ大百科 朝倉 邦造
 Nifty - Serve 徹底活用マニュアル 武井 一巳
 ワープロの使いこなし技術 谷岡 康則
 パソコン統計解析ハンドブック 脇本 和昌 他著

PC-9801 98グラフィックス入門 河西 朝雄
 マイコンで化学を学ぶ 大塚 功三
 マイコンが描く数学の世界 森本 光生
 心をもった機械 戸田 正直
 新版 SPSS x 1. 基礎編 三宅 一郎 他著

コンピュータ社会の課題 ジョセフ・F. トラウブ

情報処理受験シリーズ
 ① 受験の手引 魚木 五夫
 ② 第2種コンピュータの基礎 I, II 大日方 真
 ③ 第2種プログラミング 菅野 宏
 // Cap - X 小川 俊郎
 // Fortran の読み方 菅野 宏
 // Cobol の読み方 大日方 真
 // PL/I の読み方 大日方 真 他著
 // 関連知識 I 坂野 匡弘
 // 関連知識 II 元植 郁夫 他著

哲学 (100)

倫理学 柳田 謙十郎

ミシェル・フーコー 真理の歴史
 知識人の綱権 石崎 晴己
 連帯と自由の哲学 富田 恭彦
 正義論の歴史 藤川 吉美
 シーイング 錯視〜脳と心のメカニズム 村山 久美子
 ジンメル文化論

ジンメル著 阿閉 吉男 編訳
 知識人の終焉 原田 桂彦 他著
 ジョンロックの思想世界 加藤 節
 理性の腐蝕 山口 祐弘
 具象空間の認識論 金森 修
 原始人と現代文明 平野 具男
 倫理と行為 ピーター・ウインチ
 ベーメとヘーゲル 大村 晴雄
 カント批判倫理学 川島 秀一
 ヘーゲルを裁く最後の審判ラッパ

現代哲学の遠近法 良知 力 他著
 ヘーゲル 藤澤 賢一郎
 アドルフのテルミノロギー オイゲン・フィンク 三光 長治
 人間の原型と現代の文化 池井 望
 記憶の法則 トニー・ブザン
 倫理思想の諸問題 中村 正雄
 キェルケゴール憂愁と愛 橋本 淳
 教育学的解釈学入門 H. ダンナー
 青年心理 新人類
 ストレス
 いま、女と男

アウグスティヌス講話 金子 誠司
 「誤り」の心理を読む 山田 晶
 女性心理学入門 野間 惟道
 メンタルモデル 村山 久美子
 P. N ジョンソン=レアーデ
 現代基礎心理学 3巻 4巻 5巻 八木 晃
 心理学ティータム 岡本 栄一
 判心術 コスモブレイン
 白雪姫コンプレックス 佐藤 紀子
 新心の探検隊 中島 誠 他著

歴史 (200)

三重県郷土史年表 一三重県歴史教育研究会
 三重県案内記 梅原 三千次
 四日市市史 第二巻 一四日市市

三重県史資料編 近代2・3 三重県一
 日本史小百科 24・城郭 西ヶ谷 恭弘
 亀山市の文化財 加藤 文郎 他編
 アジア現代史1〜4・別巻 歴史学研究会 編
 日中戦争 南京大残虐事件資料集第1・2巻 堀 富雄
 現代史資料3 アナーキズム
 十五年戦争史
 1. 満州事変
 2. 日中戦争
 藤原 彰 他著
 図説 戦争史 正村 公宏
 現代アメリカの出現 本間 長世
 中心地論I・II・III 森川 洋
 景観の深層 水津 一朗
 オーストラリア歴史地理 金田 章裕
 中近世都市の歴史地理 足利 健亮
 ラッツェルの人類地理学 ヨハネス・シュタインタウラー
 和歌山県の地理 小池 洋一
 空間と行動論 ケビンズ、R. コックズ 他著
 地理学における地域と空間 ジャクリーン・ボージュ、ガルニエ
 空間・景観・イメージ 京都大学文学部地理学教室 編
 西ドイツ地理学者のみた日本 ベーター、シェラー
 地理学トピックス 長谷川 典夫
 現代人のための風土論 上野 登
 国際工業配置論 上 宮川 泰夫
 スカンディナヴィア 白夜・極夜の国ぐに 立石 友男
 地理の教え方 香川 幹一
 現代中国地誌 河野 通博 他著
 世界の地理1〜12・別巻索引 野沢 敬
 古地図散歩 織田 武雄
 ビジネス・トラベル・ガイド アメリカ 角川 春樹
 日本書紀通証1〜35 谷川 士清
 しなやかな歴史の知恵 会田 雄次
 社会科学(300) 尾崎 行雄
 天皇制のゆくえ
 いま天皇制を考える 歴史学研究会 編
 現代国家の構造と機能 福井 英雄
 尾崎 弔堂全集第1巻〜第12巻 尾崎 行雄

スターリン時代 根岸 隆夫
 政治哲学序説 南原 繁
 ベストロイカは進む 稲子 恒夫
 昭和初期政党政治関係資料第1〜第4巻 船橋 治
 政治 江草忠敬
 日本政治史
 III 天皇制の成立
 IV 大東亜戦争への道 信夫 清三郎
 ゲーデター J. ウォーディス
 資本主義ファシズム・ポピュリズム エルネスト・ラウラウ
 社会主義と階級変動 W. ヴェンウォフスキ
 マルクス主義政治学入門 ラルフ・ミリバンド
 階級と階級構造 大橋 隆憲 他著
 ポスト戦後政治 八丁 和生
 元老院会議筆記 後期第33巻 井田 和夫
 日本の政治 近代政党史 国政問題調査会 編
 個人主義と自由主義 S. ルークス 他著
 ジャバアメリカの時代に 加藤 哲郎
 アメリカ政治経済の争点 泉 昌一 他著
 日本の国際化を考える 矢野 暢
 モダニズムとポストモダニズム 石井 伸男 他著
 ユートピアへの勇氣 ゲオルク・ピヒト
 協同組合と社会主義 今井 義夫
 新ドイツ学のすすめ 篠田 雄次郎
 深層の社会主義 袴田 茂樹
 批判理論と社会システム理論 下 J. ハーバーマス 他著
 先進国革命の理論 上田 耕一郎
 社会化と政治体制 W. ブルス
 社会主義の再生は可能か 江口 幹
 ヨーロッパ思想史 恒藤 武二
 トロッキーとゴルバチョフ 上島 武
 アメリカにおける地域的特性と全国統一 小川 晃一 他著
 アジアの昇龍 谷野 作太郎
 偉大な遺産 池田 光義
 日本を向くカナダ 岩崎 力
 ウォール・ストリート 寺澤 芳男
 新版 注釈会社法9 上柳 克郎 他著
 現代契約法大系第2巻 遠藤 浩 他著
 旅行業法解説 旅行業法制研究会 編
 拘禁処遇の理論と実践 柳本 正春
 刑事訴訟を考える 渥美 東洋
 ゼミナール刑事訴訟法 上 小田中 聡樹
 刑法総論 曾根 威彦

法社会学の基礎理論 河上 倫逸
 刑事政策講義 大谷 實
 口述 民事訴訟法 谷口 安平
 刑法各論講義ノート 日高 義博
 新 旅行業法・約款 実践 Q & A
 旅行法令研究会 編
 おんなの法律キーワード 渥美 雅子 他著
 裁判実務大系 20 小川 英明 他著
 民法 I 五十嵐 清 他著
 現代法律学全集 26、刑法各論上巻
 大塚 仁
 刑法総論 福田 平
 刑法講義各論 大谷 實
 刑法各論 中山 研一
 刑法概説 総論 各論 大塚 仁
 市民憲法史 杉原 泰雄
 現代刑法学原論 総論 刑法理論研究会 編
 刑法 I 内田 文昭
 刑法総論 不破 武夫 他著
 概説 犯罪総論 大野 平吉
 刑法通論 I 総論 青柳 文雄
 市民法の基礎構造 篠原 敏雄
 ドイツ憲法思想史 石川 敏行
 行政上の確約の法理 乙部 哲郎
 相続の法律入門 谷口 和平 他著
 新版 注釈会社法 江草 忠敬
 刑法各論 斉藤 誠二
 新版 国際私法入門 澤木 敬郎
 国際法 横田 喜三郎
 国際法の基本問題 西尾 みちみ
 国際取引と法 松井 芳郎 他著
 自然法 反省と展望 水波 朗 他著
 刑事訴訟法 新版 平野 龍一 他著
 続 刑事訴訟法 平野 龍一 他著
 刑法の七不思議 ホセ、ヨンパルト
 刑法の焦点 共犯 錯誤 大塚 仁
 条解 民法 I、II 篠塚 昭次
 刑事裁判ものがたり 渡部 保夫
 ゼミナール 刑法の解釈 香川 達夫
 韓国家族法入門 山田 鏡一 他著
 現代憲法大系 11、憲法と裁判
 樋口 陽一 他著
 法の理論 9 ホセ、ヨンパルト 他著
 市民法入門 小室 金之助 他著
 法と政治の理論と現実上、下巻
 関西大学法学部 編
 海洋法の歴史と展望 山本 草二 他著
 国際関係法の課題 高野 雄一
 トマス主義の法哲学 水波 朗

国民経済計算年報 '88 経済企画庁 編
 線型経済学と動学理論 有賀 裕二 他著
 ケインズ全集 26、戦後世界の形成 ケインズ
 政治経済学とマルクス主義 高須賀 義博
 統計データの読み方 杉山 高一 他著
 産業の経済学 宮沢 健一
 マクロ経済学研究 吉川 洋
 福祉の経済学 アマルティア、セン
 価値論の射程 山口 重克
 現代経済学 II 置塩 信雄
 ケインズ主義の再検討 早坂 忠
 ポストケインジアン叢書 資本理論とケインズ
 経済学 山田 克巳
 アメリカ経済学の歴史 久保 芳和
 ケインズ 一般理論の形成
 リチャード、カーン
 経済理論と現代資本主義 置塩 信雄 他著
 経済原論講義 山口 重克
 人と組織の社会経済学 宮本 光晴
 価値論史の巨峰 永谷 清
 剰余価値論の研究 立花 敬雄
 市場価値論の研究 高木 彰
 マルクス経済学 II 置塩 信雄
 日本の地域構造 1～6 千葉 立也 他著
 立地論 西岡 久雄
 現代の国家独占資本主義上・下
 上野 俊樹 他著
 世紀末資本主義 R、ボワイエ
 転換期の国家・資本・労働 廣田 功 他著
 石油と日本経済 小峰 隆夫
 地域経済論 真継 隆
 ネットワーク支配解体の戦略 小倉 利丸
 アメリカ経済 赤字の嘘 井上 宗迪
 アメリカ経済史 II 鈴木 圭介
 生活様式の経済理論 成瀬 龍夫
 税制改革で変わる日本経済 中谷 嶺 他著
 従属の政治経済学 メキシコ 恒川 恵市
 日本経済が変わる 海野 恒男
 日本経済史 1、経済社会の成立
 速水 融 他著
 不思議の国 日本経済入門 Q & A
 原田 泰 他著
 日本の軍拡経済 坂井 昭夫
 EC 欧州統合の現在 金丸 輝男
 モチベーション研究 井尻 昭夫
 企業環境論 西尾 一郎
 現代企業の経営行動 末松 玄六
 会計学一般理論 山下 勝治
 経営学総論と管理会計新論 吉永 雄毅

会計法規の読み方・学び方 井上 英雄
 原価計算講義 溝口 一雄
 会計学の基礎知識 産業経理協会 編
 技術革新と中小企業 一中小企業庁一
 世界統計年鑑 一国際連合統計局一
 道徳性の形成 L. コーネルバーク
 不当労働行為事件命令集 一中央労働委員会事務局一

コミュニケーションと文化変動 白水 繁彦
 現代の労働時間問題 西岡 幸泰
 日本労働年鑑 '88 一原社会問題研究所一
 家計調査年報 '87 一総務庁一
 生きる条件 久保 金雄
 現代社会学大系

ミード
 ジンメル
 デュルケム
 ガースミルズ
 マンハイム・シェーラー
 アドルフ

現代労働問題と「人づくり」 青木 春雄
 社会主義社会論 西村 脩通
 コンシューマリズム 藤田 勇
 労働法の諸問題 谷原 修身 他著
 現代労働法(2) 東京大学労働法研究会
 労働法 第2版 坂本 重雄 他著
 社会心理学ショート・ショート 菅野 和夫
 日米文化交流事典 岡本 浩一
 労働契約法の理論 亀井 俊介
 不当労働行為の法理 下井 隆史
 長時間労働シンドローム 外尾 健一
 ビーターパン・シンドローム 辻岡 靖仁 他著
 国民生活白書 昭和63年版 ダン・カイリー
 フェミニストの理論 一経済企画庁一
 先進社会の階級構造 J・ドングエン
 転換期の福祉国家(上) A・ギデンス

女性自立とライフ・サイクル 森 圭一 他著
 サ・ハウス ザ・ホーム 吉野 正治
 生活としてのエコロジー A・G・エコロジー
 ミドルエイジ症候群 稲村 博
 コピー体験の文化 平野 秀秋 他著
 日本人の阿闍世コンプレックス 小比木 啓吾
 アメリカ 砂漠よ永遠に

ジャン・ボードリヤール
 貧乏研究 B・S・ラウンドリー
 労働法概論 中巻1 石井 照久

労働法学の理論と課題 前田 達男 他著
 不当労働行為救済の法理論 道幸 哲也
 青少年白書 昭和63年版 総務庁青少年対策本部

現代家族の危機 望月 嵩 他著
 日本人の家族関係 上子 武次 他著
 個を生かす集団づくりの思想 全国集団学習研究協議会 編

親の生き方子の自立 石井 郁男
 英知の教育 大野 純一
 教師の資質向上 日本教育経営学会
 女性の成長と心の悩み 入見 一彦
 生きものを教える 兼松 仁郎
 人間としての教師 田中 孝彦
 生命を尊ぶ心を育てる指導 文部省 編
 生活体験や人間関係を豊かなものとする生徒指導 文部省 編

禁煙教育実践記 仲野 暢子
 学校に行かない子どもたち
 登校拒否を考える会

親の生きかた子の自立 石井 郁子
 合格の技術
 合格の技術問題集 教職サービスセンター
 登校拒否 西條 隆繁
 ドラマのある授業 石井 郁男
 幼児期の育ちと中学生の心と身体の発達 河添 邦俊

天皇をどう教えるか 渡辺 賢二 他著
 心の教育 沖原 豊
 児童・生徒の問題行動 木田 宏
 発問上達法 大西 忠治
 友情は2万キロのザイールへ 中嶋 美沙子
 学校の人間関係 島田 一男

暴力・いじめと教育 山口 治
 たった一度の中学時代だから 関 誠
 日本の中学生 千石 保 他著
 学校不適合シンドローム 中里 徹
 友だちは、ぼくの宝です 頓宮 昭二
 民主的道徳教育の理論 右島 洋介
 心を育てる道徳指導 岡崎 豊

戦後の子ども史 中野 光
 管理主義教育をこえて 木村 武光 他著
 21世紀の教育基本書 阿部 真美子 他著
 新しい児童心理学 波多野 完治 他著
 いじめ問題 稲村 博
 いじめのない世界 伊藤 みつ子
 学校と非行 いじめを中心として 檀山 四郎
 青年期の意識構造 加藤 隆勝

教師の体罰・暴力 今橋 盛勝

教師のライフコース 稲垣 忠彦 他著
 現代の青少年 池木 清 他著
 生徒心得 坂本 秀夫
 子どもの現代史 金田 茂郎
 大学一般教養課程履修読本 近藤 精造 他著
 日本教育年鑑 1988

日本教育年鑑刊行委員会
 よみがえれ、学校 長野県の教育を考える会
 ともしび 津実高創立40年記念誌編集委員会
 子どもの心をひきつける教室の話 松尾 桂一
 学校は地域に何ができるか 渋谷 忠男
 ノートや鉛筆が学校を変えた 佐藤 秀夫
 家庭科教育における消費者教育指導の実際

藤枝 恵子 他著
 生活設計と家庭科教育 堀田 剛吉 他著
 中学校社会科指導細案
 公民的分野 星村 平和
 歴史的分野 佐藤 照雄
 地理的分野 篠原 昭雄
 治療教育講義 ルドルフ・シュタイナー
 子どもの心をつかむ新しい学級経営

松尾 桂一
 子どものボディ・ランゲージ
 スザン・サース
 ことばの前のことば やまだ ようこ
 ごっこからファンタジーへ 内田 伸子
 青年心理学ハンドブック 西平 直喜 他著
 キャンパス・トピックス 神保 信一
 東洋大学百年史 資料編1 上

東洋大学創立100年史編纂委員会
 現代教育学事典 青木 一 他著
 道徳教育はこうすればおもしろい 荒木 紀幸
 だれにも出番がある学校 小嶋 一郎
 青い鳥症候群 清水 将之
 やさしさのゆくえ 現代青年論 栗原 彬
 不安症候群 内山 喜久雄
 「私探し」の綱渡り 斎藤 次郎
 満点ママひとりっ子症候群 松原 達哉
 思春期挫折症候群 稲村 博
 教育公務員の勤務条件 青木 宗也
 教育公務員が個人責任を問われるとき

公人の友社
 学徒勤労報国隊 茶園 義男
 家教連20年のあゆみ 家庭科教育研究者連盟
 わかる授業の心理学 北尾 倫彦 他著
 衣服のアルケオロジー フィリップ・ペロー
 被服心理学 神山 進
 現代風俗史年表 清水 勝
 日本の労働着 垣本 武伯

モースの見た日本
 カムイユカラと昔話 相賀 徹夫
 性と結婚の民族学 和田 正平
 日本人の食生活と食料問題 総理府広報室
 日本服飾美術史 河崎 実英 他著
 大地から 3 野澤 三郎 他著
 アメリカの核軍拡と産軍複合体
 産軍複合体研究会
 アメリカ国防総省S&D局 NHK取材班

自然科学(400)

理科年表 '88 東京天文台 編
 糖尿病運動療法の正しい知識 佐藤 祐造
 生命を捉えなおす 清水 博
 学術用語集 化学編 日本化学会 編
 化学英語の解釈研究 橋本 吉郎 他著
 教養の統計学 深谷 浩
 数 その意外な表情 片山 孝次
 化学・英和用語集 橋爪 斌 他著
 化学英語の活用辞典 福富 斌夫 他著
 応用生物系のための基礎化学 伊出 優
 天然物有機化学 平田 義正
 統計データの読み方 杉山 高一 他著
 数は生きている 銀林 浩 他著
 初等量子化学 その計算と理論 大岩 正芳
 応用微生物学 I 相田 浩 他著
 たのしむ数学10話 足立 恒雄
 数学的経験 柴垣 和三雄 他著
 経営のための多変量解析法 本多 正久 他著
 数学が苦手な人のための多変量解析ガイド
 古谷野 亘
 臨床検査医学事典 臨床検査医学事典 編
 医学大事典 森岡 恭彦
 心身医学 石川 中

BIOLOGICAL CHEMISTRY
 Henry R. Mahler
 A CHEMICAL BACKGROUND TO
 NURSING

Gerld F. Grillot
 新しい解剖生理学 山本 敏行 他著
 大学課程の生理学 鈴木 泰三 他著
 生物有機化学 井上 祥平 他著
 医科生科学 野口 知雄 他著
 プロスタグランジン最近の研究の進歩
 鹿取 信 他著
 生命の誕生と進化 大野 乾
 脳の栄養 中川 八郎

炭酸ガス 長倉 功
 朝刊シンドローム 笠原 嘉
 不安症候群 内山 喜久雄
 ワトソン山遺伝子の分子生物学 James D. Watson
 ロビンズ 基礎病理学 I・II 森 巨 他著
 アンソニー解剖学・生理学 I・II 嶋牛 和世
 図説・病気の成立ちとからだ I・II 中野 昭一
 新 病理学提要 今井 環
 カラスケッチ解剖学 山本 一郎 他著
 有機化学演習 大木 道則
 血液の話 三輪 史朗
 天然物化学の新しい展開 磯部 稔 他著
 生化学演習 柳田 充弘 他著
 明治の化学者とその抗争と苦渋 廣田 鋼蔵
 身近な生物間の化学的交渉 古前 恒 他著
 入門機器分析化学 庄野 利之 他著
 生命の無機化学 松島 美一 他著
 新 日本動物図鑑 上・中・下 岡田 要
 化学 II 化学結合と反応速度 森 雄次 他著
 化学史 常識を見直す 日本化学会 編
 化学 I 物質の状態と化学熱力学 谷崎 義衛 他著
 合成の化学 大岳 望
 化学のことば 泉 邦彦
 思い違いの化学史 青木 国夫 他著
 国民栄養の現状 厚生省 編
 全人的健康とは 近藤 祐
 ベルシー・ウォーキング 福永 哲夫
 健康と科学 健康と環境 斉藤 和雄
 健康になるための栄養学早わかり
 ロジャー・ウィリアムズ
 からだの機能を開發する
 ロジャー・ウィリアムズ
 管理栄養士国家試験の傾向と対策 小立 正彦
 日本人の栄養所要量 厚生省 編
 生活の保健学 秋山 房雄
 ことわざ栄養学 落合 敏
 食料・栄養・健康 8・8 食糧栄養調査会 編
 過酸化脂質と栄養 五十嵐 脩脩 他著
 米・大豆と魚 藤巻 正生 他著
 今日の乳児栄養 金森 正雄 他著
 食品加工学 金田 尚志 他著
 非栄養素と生体機能 吉田 昭 他著
 新 公衆衛生学入門 田中 正四
 衛生・公衆衛生学 緒方 正名
 新 衣服衛生学 米田 幸雄

近未来の人間科学事典 田中 正敏
 日本人はなぜ長生きするか 菱沼 従尹 他著
 狂ってしまった野菜たち 村野 雅義
 知能がきまる三歳までの栄養 小林 司
 わかりやすい食品添加物 大森 義仁 他著
 食品と水分活性 John A. Trofeller
 静脈栄養 曲直部 壽夫 他著
 経腸栄養 佐藤 博
 栄養病理学 宮川 正澄 他著
 食生活論 福場 博保 他著
 ポイント薬学計算 坂本 正徳
 主題図作成の基礎 安仁屋 政武
 略地図の書き方 香川 幹一
 地図の教室 大久保 武彦 他著
 地図の書き方と読み方 藤田 和夫 他著
 地域の科学 山田 安彦
 地図表現入門 浮田 典良 他著
 地形小論 水山 高幸
 工学・技術(500)
 三重県工業試験場要覧
 綿スフ織物工業発達史 谷原 長生
 既製服の時代 鍛島 康子
 かけはぎ技術大全 吉村 一男
 環境白書 88 環境庁 編
 日本家政学文献集 1969~1986 日本家政学会 編
 パリ条約講話 後藤 晴男
 ファッション・ビジネス基礎用語辞典 関根 義男
 被服構成のための実験書 日本繊維製品消費科学会 編
 新しい繊維の知識 吉川 和志
 文化ファッション講座 婦人服 3・4 大沼 淳
 モード・ドローイング 顔・頭
 モード・ドローイング コスチューム(女性) 矢島 功
 新版 衣料消費科学 赤川 直亮 他著
 現代被服材料学 熨斗 秀夫 他著
 家政学の根本問題 原田 一
 概説 被服材料 宇野 虹児
 家政学の時代 氏家 寿子
 アメリカ家政学会・その卓越した歴史 Helen Pundt
 快適な衣服を求めて Susan M. Watkins
 調理学実習 Cooking 1・2

2001年の調理学 松元 文子 他著
 調理用語辞典 全国調理師養成施設協会 編
 身近な食べ物の調理学実験 川端 晶子
 食べ物と水 松元 文子
 食品加工産業の多国籍企業 加藤 護
 戦後の日本の繊維工業 竹田 秀樹
 繊維工業 大川 一司
 東南アジアの繊維産業組織と貿易 池田 勝彦
 東レのハイテク戦略 椎塚 武
 いま、水が危ない 日本水質研究会 編
 原発と人間 人類とエネルギー研究会 編
 環境化学物質要覧 環境庁 編
 室内環境学 瀬沼 勲
 驚異の希金属・レアメタル 吉松 史朗 他著
 食品バイオテクノロジー 貝沼 圭二
 高炉工場の立地と変遷 山口 貞雄
 衛生工学入門 中島 重旗
 原子力の安全を考える 佐藤 一男
 原子力安全最前線をゆく 中部原子力懇談会
 物理のドレミファ 米山 正信
 やさしい原子力 近藤 駿介
 ドキュメント原子力政策 石川 欽也
 現代人間工学概論 浅沼 喜代治
 人間理解と育成のための新しい育児学 野村 泰代
 酵素利用ハンドブック 小崎 道雄
 食品工業のファクトリー・オートメーション 草間 和彦

産 業 (600)

非営利、公共事業のマーケティング 梅沢 昌太郎
 綿スフ織物工業発達史 谷原 長生
 小作騒動に関する史料集 農政調査会 編
 通商白書 '88 通商産業省 編
 カード業会 藤森 正敏
 これからのDIY店経営 流通システム開発センター
 スポーツ市場最前線 通商産業省 編
 作業工具流通の近代化
 コンビニ・ミニスーパーの実態
 塗料流通の近代化
 陶磁製タイル流通の近代化
 金属製家具流通の近代化
 スポーツ用品流通の実態
 洋紙の流通構造
 無店舗販売と宅配システム

FRP浄化槽の流通構造
 スポーツ用品の流通構造
 計量器の流通構造 通商産業省 編
 食料経済 山田 三郎
 流通「自由化」と食管制度 三島 徳三
 中小企業と大企業 中村 精
 いま、時代は感性 岡橋 葉子
 繊維・衣料の市場戦略 田中 政治
 現代地場産業論 下平尾 勲
 新しい消費者のパラダイム 飽戸 弘
 感性消費・理性消費
 電通マーケティング戦略研究会
 成熟型消費市場のマーケティング 小島 健司
 伝統を生かす小さな地場産業 国民金融公庫調査部
 地場企業のマーケティング戦略 田中 利見
 戦後日本の産業政策 鶴田 正
 製糸金融調査成績 昭和五年度 農林省蚕糸局 編
 日本蚕糸業発達史 上 高橋 亀吉
 第四次全国総合開発計画 国土庁計画調整局
 市場開放とアグリビジネスの選択 岸 康彦
 これからのバイテク農業はどう変わるか 青木 伸雄

芸 術 (700)

想像力と幻想 高階 秀爾
 日本近代の美意識 高階 秀爾
 手軽にできる足裏健康法 手嶋 昇
 体育科学 浅見 俊雄
 現代生活と健康・スポーツ 手沢 健次
 フィットネス・ウォーキング 芝山 幹郎
 健康体力づくりのスポーツ科学 波多野 義郎 他著
 日本の染織 技と美 藤岡 護
 古きものの美しい発見 小津安二郎を読む 奈良 義己
 監督 小津安二郎 関根 栄郷
 映画はいかにして死ぬか 蓮賀 重彦
 小津安二郎の美学 ドナルド リチー
 小津安二郎の芸術上・下 佐藤 忠男

語 学 (800)

倭訓栞 上・中・下
倭訓栞 後編

谷川 士清

梶井基次郎・中島敦

日本文学研究資料刊行会 編

若い詩人の肖像・火の鳥 伊藤 整
恋人の眼やひよんと消ゆるや 小林 察
文芸読本 梶井基次郎 清水 勝
蕩児帰郷 丹羽 文雄
わが母、わが友、わが人生 丹羽 文雄
雨の日には車をみがいて 五木 寛之
随想 青鉛筆 後藤 隆之
黒いシャルワール

文 学 (900)

事実の考え方 柳田 邦男
静寂 鈴木 斌
日本興業銀行 高杉 良
横光利一の文学と生涯 由良 哲次
横光利一 近代小説の存亡 茂木 雅夫
丹羽文雄集 丹羽 文雄
梶井基次郎全集第1〜3巻 梶井 基次郎
文芸読本 横光利一 清水 勝
三重の文学 植村 文雄 他著
横光利一と新感覚派

日本文学研究資料刊行会 編

横光利一集 横光 利一
日本のアウトサイダー 河上 徹太郎
横光利一の軌跡 梶木 剛
梶井基次郎論 鈴木 二三雄
私の作家研究 横光利一 古谷 綱武
横光利一の芸術思想 由良 哲次
横光利一 井上 謙
昨日の花々 田村 泰次郎
田村泰次郎集 火野 葦平 他著
梶井基次郎の肖像 小山 栄雅
梶井基次郎とその周辺 遠藤 誠治
丹羽文雄の短篇30選 丹羽 文雄
横光利一論 岩尾 正勝
色とつやの文化 戸井田 道之
巴里の空はあかね雲 岸 恵子
梶井基次郎 中谷 孝雄
海燕 田村 幸久 編
筑摩文学の森

- 1 美しい恋の物語
- 2 心洗われる話
- 3 幼かりし日々
- 4 変身ものがたり
- 5 おかしい話
- 6 思いがけない話
- 7 恐ろしい話
- 8 悪いやつ物語
- 10 賭けと人生
- 15 とっておきの話

—筑摩書房—

サーダット、ハサン、マントー
篠沢 フランス文学講義Ⅱ・Ⅲ 篠沢 秀夫
文学テキスト入門 前田 愛
フランス語フランス文学研究文献要覧
日本フランス語フランス文学会
ふるさとのしおり 三重の文学と風土
ふるさとのしおり編集委員会
三重文学をあるく 藤田 明